

Asian Breeze



タイ バトナム・ターニーの小学校。1日の授業が終わった後、廊下に出て登壇の時間を待つ子供たち。

いま、女性たちは —WOMEN TODAY— 2
 第1回 海外通信員セミナー 3
 フォーラム事業報告 6
 海外通信員レポート 8
 ユニフェム北九州が発足 11
 フォーラムの窓 11



OCTOBER 1994 No. 12

いま、女性たちは —WOMEN TODAY—



国際連合日本政府代表部公使

堀内 光子

人口開発会議を終えたと思ったら、国連総会が始まり、忙しい秋になった。来年の国連設立50周年に向けて、国連の役割、国連の機構改革の議論が高まっている。

カイロからの帰途、紀元前3千年もの昔から栄えた文明発祥の地エジプトが、5千年後の今、明日の地球文明の維持のための議論するのにふさわしい地だったのかもしれないと思いついた。この会議は「中絶」を巡ってのプロチョイスとプロライフ、パチカンのキャンペーンがマスメディアを賑わし、注目を浴びた。しかし、「中絶」はこの会議の唯一の問題ではなかった。1万世代かかって20億に達した世界人口は、過去わずか50年で20億から56億に達した。これから、20年後の世界人口は71億から78億、来世紀半ばには79億(低位推計)から119億(高位推計)になると推計されている。増え続ける人口を前に、人口の安定、持続可能な開発、環境、女性の教育・経済的地位の向上やエンパワーメント(力をつけること)など幅広い問題が取り上げられた。残念ながら、これらの問題は「中絶」の陰に隠れ、目立たなかったが、一方、分かりやすい争点があったために人口会議のマスメディアの取り扱いが大きく、広報という点ではメリットが高かった。また、女性の地位向上問題の重要性が女性問題以外の分野でこれほどまでに取り上げられたのも初めてであり、会議の成果は大きかったと言える。

初日はサディク人口基金事務局長に加え、フルントラント・ノルウェー首相、ブット・パキスタン首相と世界有数の女性指導者が顔をそろえ、女性問題の重要性を実感する会議となった。この会議では、比較的新しい概念である「リプロダクティブ・ヘルス」と「リプロダクティブ・ライツ」が合意され、リプロダクティブ・システム、その機能やプロセスに関する総合的な福祉と定義されたが、これは女性運動の成果と言える。人口会議が単にマクロ経済問題だけでなく、個々の人びとの問題に焦点が当てられたという意味でも、新しい時代を迎えたと言えよう。10日間、最終日を除き毎日ナイトセッションが続き、朝から晩まで会議場のインフォーマル・ミーティング出席の日々で、NGO会場を覗けなかったのが残念であった。

カイロ会議直前まで、ニューヨークでは、来年3月に開催される社会開発サミットの準備委員会が開催されていた。貧困、雇用、社会への完全参加がテーマで、人びとの生活の質を確保するための世界行動づくりが会議の目的。ここでも男女平等問題は一つの大きな視点である。冷戦崩壊後、国を構成している人びとの人権や安寧に焦点がより当てられるようになってきたのは、喜ばしい。格差の少ないより公平な市民社会を築くことが、民主的で安定した社会の基礎要件である。国連では、人口に続き、来年は社会開発、女性と、社会問題に関わる一連の世界会議が開催される予定である。幸いにも私はこれら全ての会議に関わることとなり、社会正義の実現に向けての国際努力の一端を担うことは楽しみでもある。国連が経済社会分野で、特に女性施策のようなメインストリームにない施策分野で、世界の世論形成に果たす役割には大きいものがあるが、来年が国連50周年ということも考慮に入れても世界会議が多すぎるという感じがしないでもない。会議の意義や焦点をきちんと定め、会議後のフォローアップをきちんとすることを心しなければいけないと思う。

世界情勢は多くの識者が指摘しているとおり、冷戦崩壊後、人びとの平和への期待は裏切られ、地域の民族あるいは宗教紛争が頻発している。二大世界パワー緊張の中で表に出なかった民族の誇りや宗教の力が人びとを引き付け、新たなエネルギーとなっている。国連が確立した普遍的価値や人権の尊重に従うものの、多様な宗教的、倫理的価値観や文化的背景の尊重が強く打ち出されてきている。こと女性の人権を考えるとときには、基本的には是正していく必要のある男女の固定的な役割分担意識や慣行は伝統的慣行や文化のなかに残っていることが多く、こうした傾向にやや危惧の念を禁じ得ない。

この夏から末の娘がニューヨークに住み始めて国連国際学校に通っている。この学校は1947年国連勤務の親たちのグループが、子供に異なった文化的遺産を保持しつつ国際教育を受けさせるためにつくったもので、現在は幼稚園から高校まで、102か国、1,442人の子供たちが通っている。目下娘は英語に四苦八苦の毎日であるが、しばらくすれば慣れるに違いないと楽観している。本人の意欲だけは十分で日本の学年より1年上に通っているが、英語が母国語でない生徒には歴史などの科目を英語の特別クラスで習うというような工夫がされている。娘は特別クラスを14時間も取っている。日本人なので日本語の授業もある。朝晩宿題を見てやり、毎朝イーストリバー沿いのウォーターフロントにある学校まで娘を車で送る毎日。私のニューヨーク生活の質も改善されているような感じである。

第1回海外通信員セミナー



アジア女性交流・研究フォーラムでは、アジア諸国との幅広い情報ネットワークを形成し、アジアの女性の状況について最新の情報を収集・発信するために、1991年から海外通信員制度を設け、毎年通信員を募集しています。初年度は6か国6人でスタートしましたが、年ごとに充実し、この4年間で延べ57人の海外通信員が誕生しました。

そこで、フォーラムと海外通信員の間での情報交換だけでなく、海外通信員相互、また、海外通信員と市民の皆さんとの情報交換を進めるために、9月1日～9月8日に、第1回海外通信員セミナーを開催し、さまざまな交流プログラムを展開しました。

セミナーには、招聘した9か国9人の通信員に加えて、現在来日中のOB?人も飛び入りで参加、総勢11人の通信員が一堂に会し、交流と親睦の輪を広げました。

今回のセミナーのテーマは「教育と女性」。海外通信員は、メイン行事である長時間討論会「海外通信員マラソン会議」をはじめ、小学校や中学校での研究授業や交流会、熊本県小国町での物産館や小学校視察、女性団体との交流会など、ちょっぴりハードなスケジュールを精力的にこなしました。

セミナー参加者

- 朱耀先 (河南省女性学研究所研究員・中国)
- スワプナ・マジュムダール (ジャーナリスト・インド)
- ヘルタミ・ジャトミコ (婦人の役割省上級スタッフ・インドネシア)
- 仲間まち子 (主婦・マレーシア)
- シャラッド・B・シュレスタ (NGOスタッフ・ネパール)
- カリド・ハイダー (日本大使館スタッフ・パキスタン)
- エストレラ・M・マニクス (アブスニユース編集長・フィリピン)
- 許雲那 (漢陽大学教育工学科教授・韓国)
- インドラーニ・スガサダサ (保健・婦人問題省婦人局長・スリランカ)
- 王静 (主婦・中国)
- エレナ・L・サモンテ (フィリピン大学準教授・フィリピン)

学校交流会

北九州市内の小学校と中学校を訪問し、授業や全校集会、クラブ活動などに参加したほか、PTAや教師の皆さんとも交流を深めました。



▲高生中学校



▲福岡教育大学附属小倉小学校



▲企救丘小学校

海外通信員マラソン会議

人間形成や社会開発を進めるために欠かすことのできないのが教育です。特に、女性はその能力を向上させて社会参加を果たし、国の発展に貢献していくためには、女性に対する教育を充実しなければなりません。

そこで、9人の通信員が交替でパネリストになって、家庭教育、学校教育、生涯学習、人材開発など、人生のさまざまな場面において教育が果たす役割について、市民の皆さんと徹底討論しました。コーディネーターは、ILO東京支局長の藤井紀代子さんがつとめました。

第1セッション：子供と教育



朱耀先さんは、一人っ子政策がとられている中国の家庭教育について「一人っ子は甘やかされて育ち、協調性や自立心に欠ける。また一方では、両親の過度の期待というプレッシャーも受けている。両親の体罰による死亡事件も起こっている」と問題点を指摘し、「親は子供の学力

の向上だけに関心を注ぐのではなく、道徳教育や社会性、忍耐力、克己心を養う教育を行うべきである。また、愛情と厳しさの調和した科学的な教育を行うべきである」と提言を行いました。

スワプナ・マジュムダールさんは、インドの学校教育について「インド憲法は義務教育を定めてはいるものの、州レベルでは制度化されていない。貧困家庭では、子供が働いて家計を支えている。生計維持と教育の必要性の葛藤の中、しわ寄せを受けるのは女の子であり、就学しない子供の70%が女子である。義務教育の法制化、子供たちが歩いて行ける距離に学校をつくり、教師の数を増やすことなど将来に残す課題は多い」とレポートし、教室の中からインドの将来が生まれるだろうと結びました。



仲間まち子さんは、国際結婚をしてマレーシアで生活する自身の体験を紹介しながら、「国際結婚カップルの子供の教育で重要なことは、子供が自己のアイデンティティを確立していくよう導くことである。そのためには、父母の両方の母国語を習得しなければならない。また、両親が、それぞれの国の文化や習慣を尊重するという基本的態度が必要」と国際結婚と家庭教育の問題についてレポートし、さらに、「子供の二重国籍が認められるよう希望する」と母親としての気持ちを述べました。

第2セッション：生涯学習

許雲那さんは、「韓国では伝統的な儒教の教えに従い、女性は夫や子供のために自分の人生をささげてきた。しかし、最近では、自分自身の考えを持ち、自立しようとする女性たちが増えてきた。このような女性たちを支援するために、女性の能力向上のための戦略が必要である。大学や民間の教育機関が技能訓練や生涯学習プログラムを実施しているが、女性の能力向上のためにさらに公的な投資が行われるべきである」と女性を人的資源として活用するための教育の重要性を強調しました。



エストレラ・マニクスさんは、動物キャラクターの登場する子供向け番組から、料理や家事、会社経営を指導する番組まで、さまざまなフィリピンのテレビ番組を紹介し、「メディアは単に情報を提供するだけでなく、教育や意識向上、人びとの行動の動機づけに役立っている」と述べました。さらに、自身の仕事に触れ、「これまで影の存在であった女性にスポットを当てて記事を書いている。女性たちを束縛してい

熊本県小国町を訪問

熊本県小国町は人口1万人の山村です。小国町では、農産物の小国ブランド化、ユニークな建築物づくり、若者や旅館経営者、女性を中心としたまちづくり運動など、独自のまちづくりに取り組んでいます。通信員は小国町を訪問し、農山村振興プログラムやまちづくりの手法について学んだほか、地元女性の皆さんとの交流会に出席しました。



▲木魂館

る慣習や伝統、社会問題を明らかにし、女性たちがよい方向に向かうことを願う」と語りました。



カリド・ハイダーさんは、「パキスタンでは、女性の役割は家族の世話をすることであり、女性の教育は社会的な偏見と家族の非協力的な態度により阻害されてきた。少しでも自立心を示す女性は否定的な目で見られ、特に働く女性は男性や年長の女性から非難を浴びる」とパキスタンの状況を紹介しました。そして、母親は家族の核であるから、女性が教育を受けキャリアを積むことは、家族の弱体化や家庭崩壊につながるという仮説を示し、会場の皆さんと活発な議論をしました。

また、「プロジェクトを成功させるためには、女性たちは、市場開発、農産物加工、リーダーシップ、労働安全知識などの能力を習得しなければならない」と女性の能力開発の重要性を指摘しました。



また、「プロジェクトを成功させるためには、女性たちは、市場開発、農産物加工、リーダーシップ、労働安全知識などの能力を習得しなければならない」と女性の能力開発の重要性を指摘しました。

第3セッション：労働と教育

インドラニ・スガサダさんは、「スリランカでは、女性の失業率が高く男性の2倍に上る。そのため、女性は、農業に代表される小規模な自営業を営むケースが多い。女性の所得向上のために、国やNGOなどさまざまな機関が、技術訓練や経営指導、信用貸付などを行っており、女性の社会経済的地位の向上に役立っている」とスリランカの状況を紹介し、「今後、雇用機会の大幅な増加は見込めず、自営業振興と所得向上プロジェクトはいっそう重要になるだろう」と結びました。



シャラッド・シュレスタさんは、「伝統的に男性優位のネパールでは、女性が所得創出プログラムに参加する道は必ずしも平坦ではない。1日の労働時間が男性よりも11時間も長い女性が、家の外で所得創出活動をしたいと言っても、男性は許さないことが多い。それは自分の負担が増えるからだ」とネパールにおける所得創出プログラムの問題点を示し、しかし、「女性を教育することは国を教育することである」と政府やNGOが行っているプログラムの拡大・強化を訴えました。



最後にコーディネーターの藤井紀代子さんが、「これからは通信員の皆さんの顔を思い浮かべながらレポートを読むことができる。通信員の皆さんから直接話を聞き議論することで、私たちの世界が広がり、同時に世界がとても近くなった。私たちは、世界市民として、世界全体のことを考えながらお互いに学び合い、足りないところは補い合わなければならない。このネットワークをいっそう充実してほしい」と会議の継続開催を呼びかけました。

最後にコーディネーターの藤井紀代子さんが、「これからは通信員の皆さんの顔を思い浮かべながらレポートを読むことができる。通信員の皆さんから直接話を聞き議論することで、私たちの世界が広がり、同時に世界がとても近くなった。私たちは、世界市民として、世界全体のことを考えながらお互いに学び合い、足りないところは補い合わなければならない。このネットワークをいっそう充実してほしい」と会議の継続開催を呼びかけました。



ヘルタミ・ジャトミコさんは、「人口の半数を占める女性は、社会経済的に適切な状況に置かれれば、国の発展にとって大きな可能性を秘めた人材になる」と女性の活用の必要性を強調し、インドネシアの農村経済を支える女性たちに対する所得向上プロジェクトを紹介しました。



▲太宰府天満宮

「世界の女性とILO政策」国際セミナーを開催

フォーラムでは、女性問題の解決に向けて女性たちのネットワークの強化を図るため、全国展開事業として、5月23日から5月28日にかけてILO東京支局、日本労働研究機構、大阪府等の協力により、東京都、大阪市、北九州市の3都市で「世界の女性とILO政策」をテーマとする国際セミナーを開催しました。講師には、ILOで女性施策を推進している女性労働問題特別顧問のマリア・アンジェリカ・ドゥッチさんをお迎えしました。

北九州市で行われたセミナーでのドゥッチさんの講演を紹介します。

この10年間に起きた労働界の大きな出来事と言えば、女性の雇用が増加したことです。以前は、男性の領域とされていた高度の熟練を要する仕事や技術職にも、女性の進出が見られるようになりました。しかし、女性の間にも女性の権利に対する自覚が高まっているにもかかわらず、社会的、経済的、文化的な束縛によって、いまだに女性の活動に制限が加えられています。女性は家族に対する責任と仕事の両方の重荷を背負い、さらに、女性が経済活動に参加することに対して否定的な社会風土といった困難に直面しています。そのため、女性は男性よりも職場での地位が低く、補助的な仕事を強いられ、いつもオーバーワークに陥っています。

世界中で、多くの女性が男性の同僚と同じ仕事をして、安い賃金しか得ていません。平均して、女性の労働時間は男性より短く、同じ職業を続ける期間も男性より短いのです。一般に男性と女性は別々の職種に就き、全体としては男性が職場のトップの地位にいます。

現在のような不況や技術革新、リストラ、労働市場の変化による影響を、女性は男性より受けることが多く、パートタイム、臨時雇用や下請けといった不安定な仕事に就くことも多いのです。先進国では、過去数年の厳しい不況によって、また開発途上国では経済の

再編や過渡期の経済によって、多くの女性が苦心して手に入れたものの多くが失われてしまいました。「貧困の女性化」という現象があちこちで見られるようになったことは、単に女性だけでなく、未来の世代の男女両方にとって大きな脅威となるでしょう。

今年で創立75周年を迎えたILO（国際労働機関）は、政府、雇業者、労働者組織の三者から構成される機関として、こうした職場における差別、特に女性差別に対して戦いを挑んできました。全ての労働者の平等を促進することが、創設以来の指針です。

男女の機会均等と同一待遇の基本原則に対するILOのアプローチは、3つの視点から行われています。まず第1に、性に基づく差別を人権擁護の基本的問題ととらえ、女性の法的な権利の保障と、雇用・職業における全ての法律上、また事実上の性差別の除去に重点が置かれています。第2に、社会正義と貧困の緩和の観点から、女性の雇用の促進、職業訓練の実施、労働条件や社会的な保護の改善を進めます。第3に、社会的経済的開発の観点から、開発や労働政策の形成や意思決定に、女性の持つ能力を活用し、女性の参画を促すことで、平等の目標を達成し、同時に男女双方から成る社会の二一に対処します。

この基本原則を実現するため、ILOでは、国際労働基準（ILO条約、勧告）の策定、調査研究、諮問サービス、技術協力、会議及び情報の普及など、あらゆる手段を駆使し、またそれぞれ的手段が相互に補完し合うようなアプローチをとっています。特に、男女の間に存在する違いを認め、その上でそれぞれ違った状況やニーズ、関心等を活動に効果的に反映させることに重点を置いています。

女性の地位向上は、加盟各国の政府、雇業者及び労働者組織の意思決定と指導力に大きく依存しています。女性差別を排除し、機会均等と同一の待遇を促進するうえで、ILOが非常にユニークな働きができるのは、この三者からなる構造によるものです。

'94北九州女性国際シンポジウム

女性のエンパワーメント：私たちが社会を変える！

「女性のエンパワーメント：私たちが社会を変える」という力強いタイトルのシンポジウムが、8月9日、北九州国際会議場で開かれました。

パネリストは、ドイツ・フォルクスワーゲン社女性活用課長トラウテル・クリツケさん、中国・鄭州大学国際女子学院院长リ・シャオジャンさん、アメリカ・ラトガース大学アメリカ女性政治センター主任研究員キャサリン・クリーマンさん、そしてアジア女性交流・研究フォーラムの織田由紀子主任研究員、コーディネーターは、東京大学社会科学研究所助教授の大沢真理さんでした。

このシンポジウムは、市民で構成するシンポジウム実行委員会、アジア女性交流・研究フォーラム、北九州市の共催によるものですが、実行委員会が中心となって企画・資金集め、実施に当たりました。市民の手でこのような大きなシンポジウムを開催することができたのは、北九州市民のエンパワーメントの現れの一つと、コーディネーターの大沢さんは賞賛していました。

シンポジウムでは、各国・各分野の具体的な活動の例を上げて、エンパワーメントの必要性が示されました。シンポジウムでの報告からいくつかを紹介し、クリツケさんによるとフォルクスワーゲン社では、女性の活用は企業の経営にとって重要だと認識に基づいて女性活用課が生まれ、女性のニーズを経営に反映させるべく多彩なプログラムが進められています。また、同社10万人の雇用を確保するために労働時間の短縮を選んだ結果、週当たり労働時間が28.8時間、通算8年間の育児休業が可能になり、男女が家庭と仕事を分かち合えるようになりました。

リさんは、中国の高等女子教育＝フェミニスト教育について述べました。中国では女性は、世界の他の国に比べて、平等を享受してきました。しかし、男女は同じということが強調されすぎたために、女性に対する伝統的差別観が社会には強く残っているのを見



えなくなってしまいました。リさんは鄭州大学で中国初の女子大学をつくり、女性の自尊心、自信を高める教育を行っています。

クリーマンさんは、アメリカの女性が1970年代以降、政治に積極的に参加してきた結果、政策課題や政治の決定過程に変化をもたらしたことを報告しました。女性は、育児休暇法や銃の規制などこれまで見過ごされてきた問題の立法化に取り組んだり、また、議論の過程における透明性が高まるなどの変化を生み出していることが分かったのです。アメリカ女性政治センターでは、女性が政治の場でさらに活躍できるように、経験や情報の交換、選挙資金の支援などの活動を展開しています。

織田研究員は、「日本のODAに女性の視点が十分でないのは、日本女性が十分に力をつけていないからである。実際、雇用の場では、大卒女子の就職難やパートタイム労働などの問題もある。日本の女性は、開発の担い手として社会変革をリードし、また政策に対しても発言していく必要がある」と述べました。

最後に、コーディネーターの大沢さんが、日本は経済の転換期である今こそ、雇用の場における男女平等を実現させる機会であり、それは企業の意思次第で可能なのであるから、日本の女性が企業中心社会を動かそうと締めくくりました。

女性の地位向上のための行政官セミナー

フォーラムでは、JICA九州国際センターの委託を受けて、7月1日～7月22日に、第4回女性の地位向上のための行政官セミナーを行いました。

今回は、アジア・太平洋、中南米から9人が参加し、各国の情報を交換するとともに、日本の行政システムについて学びました。



▲開講式



▲TOTOショールーム



▼朝倉町の桃園



▲カントリーレポート発表会



▲光沢寺保育所



◀曾根東小学校



▲門司保健福祉センター

海外通信員レポート 〈テーマ 女性と家族〉

女性の就職と結婚

鈴木聡子さん
(マレーシア)

今年の4月、シンガポールの前首相リー・クワンユー氏の、結婚しない女性に関する発言が、マレーシアでも話題になりました。氏は数かずの優れた政策をもって今日のシンガポールを築くことに貢献してきたわけですが、女性に対して、教育と労働の機会を平等に与えたこともその一つでした。ところが、この政策が結局は女性の結婚難を招いたと悔いる発言をされたのです。高い教育を受けた女性が自分にふさわしい男性を見つけるのが難しく、男性も稼ぎのよい女性と結婚するなど面目まるつぶれといった意識が障害になっているというのです。氏の理想とするのは日本の女性だそうです。つまり、高等教育を受けても、働いていても、結婚したら家庭に入り、夫や子供のために尽くす内助の功型の女性が望ましいというのです。

さて、この意見にマレーシアでもさまざまな反応がありました。実際、マレーシアでも教育水準が高まり、女性の社会進出も著しいので他人事とは片づけられなかったのでしょう。初婚年齢を見ても、26.6歳(1989年)、12年以上の教育を受けた女性は、受けなかった女性よりも6年近く遅いという統計もあります。また、47.8%の女性が就職している(1992年)ということです。しかし、ここではシンガポールのような結婚難はまだないようです。シンガポールの場合

は女性の自立が著しく、人生の選択肢が増えて結婚しないケースも多いようですが、マレーシアでは、そこまで到達してはいないようです。

女性の就職率は確かに上昇していますが、その原因は工業化の進展によるところが大きいようです。海外からの企業誘致が盛んで、地方でのインフラ整備が次つぎと進められています。1つ工場ができれば、1,000人単位の雇用が生じるわけで、農村地帯の女性の生活が急速に変化しています。農業と違い仕事はきれいで現金収入となれば、結婚後も働き続けて当然でしょう。共働きの割合も今や4割強だそうです。しかし、4人に1人の女性(専門職を含む)が子供の世話のために離職しているという現実もあります。そこには、保育所の不足など物理的な原因もさることながら、先のリー氏のように、女性は家に…といった考え方も根本に見られるようです。家庭内における性差別は意外に根が深く、女性の社会進出を妨げてもいます。しかし、結婚後も働き続ける女性の数は確実に増えているのです。この狭間で、多くの女性が悩んでいるわけです。

厳しい現実ですが、若い世代はより男女平等意識が強く、家庭内の性差別にも敏感です。彼等が今後どのような人生の選択をしていくのか、私は頼もしさを感じています。

インドの女の子

Kalpana Viswanathさん
(インド)

レカは13歳の女の子。彼女は、毎朝、日の出と共に起き、畑の井戸で洗面をすませると食事の支度に取りかかります。母親が一日中畑で働いているので、食事の支度はみんなレカの仕事です。料理が終わると畑に行きます。畑ではもう両親が働いています。レカは両親を手伝い、幼い弟の面倒を見ます。昼ご飯のときには、まず弟と父親が先に食事をします。それが終わってから、母親とレカは腰を下ろして食事をします。午後、レカはまた畑を手伝います。夕方、時間があれば、友達と遊んだり本を読んだりしますが、すぐに夕食の支度を手伝う時間になります。食事をし洗い物をすると、床につき幼い体を休ませます。

彼女には夢があるのでしょうか。私はレカに将来何をしたいかを聞いてみました。「英語を習いたい。何か他のことをしたい。結婚はしたくない」と彼女は言います。レカの夢は実現されるのでしょうか。恐らくダメでしょう。彼女は多分、食事の支度と畑仕事だけで暮らし、結婚して子供を生み、子供の世話をしなければならぬでしょう。

女の子はさまざまな意味で差別を受けています。まず第1に、女子はあまり必要とされないため、誕生と同時に殺されることがあります。また、今日では、出産前に性別が分かる近代的医療技術を利用し、胎児の時期に殺されることもあります。インド南部、マドゥライ地域のウシランパティ区では、女の子に毒草を食べさせます。ラジャスタンの村では最後に女子の結婚があったのは何年も前のことだと村人たちが自慢げに語ります。

「娘を育てるのは、他人の庭の草に水をやるようなものだ」という諺があります。したがって、女の子の健康はあまり重要視されません。調査によると、病院に連れて行かれる回数も与えられる薬の量も、女の子の方が少ないのが現状です。与えられる食事の量も男の子より少なく、男性や男の子の食残しを与えられます。また、母親が娘より息子に質のよい食べ物を多く与える傾向が見受けられます。しかし、女性はお荷物だと考えられながら、実は、女性は家族のために多くの仕事をこなしているのです。農村地域では、年平均315日、1日9時間働き、農作業の20%をこなします。レカのように畑仕事と家事の両方の手伝いをするのです。

また、もし家族が子供の教育を犠牲にしないといけない場合、学校を辞めさせられるのは女の子です。辞める理由はさまざまです。畑で働いたり、家族のために稼がなければならないこともあります。また、学校が遠いため、幼い女の子を通わせるには大変だったり、危険であったりもします。

このような子供たちにとって子供時代の意味とは何でしょう。彼女たちには、幼い頃の無邪気さや自由を味わう時間があるのでしょうか。



離散する家族

北原広子さん
(タイ)

タイのお正月は四月半ばです。結婚してから何度か夫の実家に里帰りはしましたが、タイ正月に帰省したのは今年が初めてです。夫の故郷は、タイでも最も貧しい地方の代名詞として使われる東北地方の典型的な農村です。

バンコクから約600キロ。途中で一泊して到着すると、正月を祝う祭の真っ最中で、お寺には大勢の村人が集まっています。これまで何度か訪れたときの印象ではこれほど村の人口が多いとは思えず、家族に聞くと、この時期に帰省する人が最も多いとのこと。

いつものように親戚の家を回っていると、確かに見たことのない顔がたくさんあります。いつも子供を抱いて夫の家に遊びに来ていた女性からは、初めてご主人を紹介されました。バンコクで働いているそうです。

次の家には、真新しいタクシーが駐車してありました。バンコクに出稼ぎに行っている夫婦が、借金で購入したタクシーを飛ばして帰ってきたのでした。出稼ぎ中に生まれた子供はまだ3か月ですが、田舎の親戚に預けています。久びさに赤ん坊を見た母親がいとおしそうに抱いていました。友人らと協力して家賃を出し合って、広くもないアパートを借りるわけですから、バンコクでの子育ては、貧しい地方出身者には難しいと言えます。この母親も、生まれて間も



▲タイ正月

ない我が子と過ごすのはお正月の3日間だけなのです。借金の額と1日の稼ぎを聞くと、とても近い将来に一財産築けるとは思えませんから、子供は年に何回か親の顔を見るだけで成長することでしょう。出稼ぎの親は子供の学費のためにがんばります。

お寺の境内には簡易ディスコが開設され、都会帰りの若者が踊っています。住職が「バンコクへ出稼ぎに行った人びとの寄進のおかげで、このような盛大な祭が開催できて感謝します」とスピーカーを通じて伝えています。

都会への出稼ぎは確かに現金収入をもたらします。タイは今も7~8%という順調な経済成長を維持し、都会での大量労働力も必要とされ、経済の流れという側面から見たら、農村の人々が都会に出稼ぎに出ることで安い人材を大量に使えるという利点にも見えます。しかし、現金のために家族が長期的に離れ離れになることが当然の風潮には疑問を感じます。農業では生活できないという基本的問題を解決しない限り、家族はますます離れるでしょう。

本当のパートナーシップとは

許雲那さん
(韓国)

最近、韓国の新聞や雑誌、特に女性誌には、よく現代の夫婦関係が取り上げられます。記事のタイトルは次のようなものです。

『新しい時代の夫婦—共に働き、共に遊ぶ』『夫と平等—夫が料理と掃除をし、妻は洗濯と子供の世話。友達の集まりに夫婦で出席する』『現代夫婦の生活費の分担。互いの支出に干渉しない』など。

韓国では、仕事に就く女性が増える中で、夫や父親が家庭生活に以前より参加し、平等な立場に立つようになって、女性の社会的地位も高くなるという理論構成のように思えます。上記の見出しも、この理論上の社会変化を映し出しているのかもしれませんが。しかし現実には、夫婦関係は、マスコミが示すほど単純でも楽観的でもありません。これらの文章は、あらゆる年齢層や社会経済的状況の人びとに起っている変化を詳細に観察したのではなく、特定の年齢や社会経済的状況の層での変化に焦点を合わせているため、ある程度誇張されています。経済活動における女性の役割が拡大し、女性の生活様式も非常に変わったものの、女性の仕事に関する伝統的な考え方、つまり、子供の養育と家事は女性の仕事だという考え方は今でも残っています。たとえば、共働きのある女性作家は『共働きをする若い夫婦は家事を分担すると聞いたが、私の夫は家事はすべて妻がするものと考えている。彼は忙しいし、私も喧嘩したくないので、結局私が仕事も家事も全部することになってしまう。最近ではしなければならないことがあまりにも多いので大変疲れているが、だからといって、どうしたらよいというのか。これが現実だ。ときには、子供たちが少し手伝ってくれることもあるが、勉強のじやまは

したくない』と言います。これはよくある現象で、働く女性の役割をスーパーウーマンになることだと考える例です。妻が仕事を持っているのに、夫は性別によって役割を分担するという伝統的な考え方を変えていません。通常、韓国の夫は、女性が仕事に就くことは認めますが、それが家庭内での男性の役割に影響を及ぼすとすると反感を抱きます。男性は二重の判断基準を持っているのです。

今日、韓国の夫婦は、男女の役割に対する文化的要求が変化している過渡期の中にいます。理想的な夫婦関係のためのはっきりとした、文化的シナリオはまだありません。このことが、働く女性の立場をかなり難しくしています。このような状況は、典型的な韓国男性の次の言葉に示されています。

『私は長男なので、母と暮らしている。母の世代のすべての女性がそう思うように、母は男性が台所に入ったり、家事をすることを許さない。そのため、私は自由に妻を手伝うことができない。妻が家族のために猛烈に働いている間、私はただ座って、新聞を読み、一家の男子としてそこにいるしかない。』

『家事分担』という最近流行のキャッチフレーズにもかかわらず、男性の家事への参加はあまりありません。韓国の女性は、社会の変化の中で複数の役割をしょいこんでいるようです。2人の間で、役割を分担し合い、互いへの愛情と尊敬に根ざした夫婦のパートナーシップの本当の意味を手に入れるためには、まだまだ多くの困難を克服し、性別による役割という従来の考え方を乗り越えて行かなければなりません。

初めての土曜日休日を迎えて

李桂馨さん
(中国)

陽春の3月第1週の金曜日、ドアの前に貼られた「明天休息」という文字が目飛び込んできました。中国では、今年の3月から、隔週の週休2日制が実施されることになったのです。私は思わず心躍らすとともに、一種言い難い感覚に襲われ、嬉しいような、がっかりするようなで茫然としてしまいました。

長い間、大学の授業はもちろんのこと、仕事についてからも日曜日に休むパターンで、月曜日から土曜日までは忙しく働いて疲れ、日曜日の休みも家事に追われてきました。仕事や家事をきちんとさばき、職業人として、妻として、疲れを覚えることなく、心は充実感に満ちていました。このような1週間の繰返しに、私は職業婦人としてすっかり慣れていたのです。

中国が門戸を開いて後、世界に目を向け、西洋では多くの国で週休2日制が実施されているのを知って驚き、私はうらやましく思ったものでした。今、期待が現実のものとなったのに、あまりに突然の実施なので途方に暮れてしまいました。

深夜、私は初めて眠れないでいました。今度の2日間の休日をどのように過ごすかということばかり考えていたのです。柔らかな灯りが四壁を照らし、夫と子供はぐっすりと夢の世界に入り込んでいます。夢路の中で小さな口をもぐもぐさせている子供を見ていると、急に気がとがめてきたのです。子供はもうすぐ4歳になります。私は母親なのに、仕事が忙しいために子供と一緒にいる時間をあまり持っていなかったのです。そうだ、今度の土曜日は子供のためのものにしよう。

翌日の早朝、暖かい陽射しは街に口づけし、人びとは微笑みをうかべて、足どりも軽やかです。その中を私たち一家3人はとても気持ち自由で軽やかです。私たちが子供のため選んだ行き先は動物園です。動物は子供にとっていつまでも見飽きるということがないからです。

動物園に入ると、子供はかごから抜け出した小鳥のように自由自在に公園のあちこちを飛び回ります。虎、しま馬、猿、孔雀…と、子供が一つ一つ見ては一つ一つ質問をします。子供の生き生きとしたかわいい様子を見ていると、1週間の仕事の疲れも消えてしまいました。

しかしながら、午前も過ぎるころになると、私は口がからからに乾き、両足の力が抜けて、家に帰ったときには疲れ果てていました。すぐにソファに寝ころび、今度はゆっくり休みたいと思いました。目を閉じると、早い生活のテンポにまぎれて女性としての仕事である針仕事を忘れてしまっていることに気がついたのです。仕事のせいで、私は天が善良なる女性に与えた女性としての仕事をほとんど忘れていたのです。そこで、私は戸棚を開けて、何年もしまっていた毛糸を引っ張り出しました。よくは分からなくなりましたが、暖かい家庭をつくるために、やはり針を取り出しました。子供への愛、夫への情と一緒にセーターへ編み込むのです。セーターを編みながら、家のためにすべきことがあまりにも多いことに思っていたのです。

新しい生活のリズムが、私たちにより多くの余暇時間を与えてくれますが、この豊かな時間は職業を持つ女性にとっては、家庭のためのものです。なぜならば、家庭のぬくもりというものは女性とそこの手によってこそ生みだされるものだからです。



妻の共有

Sharad B. Shresthaさん
(ネパール)

フムラは、ネパールの西部地域にある人里離れた地区で、北はチベットに接するところです。チベットから移住してきたと考えられているシェルパ族が村に定住しています。ほぼ半年雪におおわれているこの地の風景は荒涼としています。人は薬草を採って暮らし、それらはネパールの首都カトマンズの市場で売られたり、インドへ輸出されたりしています。冬には、男性はカトマンズやインドへ商いに行き、女性は家にいて、夏の間に集めておいた食物を食べて暮らします。

フムラ地区のシェルパ社会には、世界の他のどの地方にもあまり見られない特色があります。同じ家の息子全員が、1人の女性を共通の妻として結婚することです。ときには、1人の女性が6~7人の男性と結婚していることもあります。この慣習は、有史以前から続いています。

長男が結婚する女性が、どんな人であれ、弟たちは彼女の妻として受け入れなければなりません。妻は、一家の暮らしがうまくいくように、あらゆる活動の日課と予定をたてます。たとえば、1人をヤクのお世話に送り出し、もう1人は市場へ行かせ、次の1人は羊小屋へ行かせるなどし、1人は自分と一緒にいることを許します。妻が与える指令は、兄弟みんなが従います。ときには、年長の夫が30歳で、一番年下の弟がほんの3~4歳ということもあり、彼女は母親としての役割をする場合も見受けられます。その子供が若者になると、彼は夫となるのです。

このような家庭生活の中で、子供の父親を特定するのは母親の特権ですが、必ずしもそれは納得のいくものではありません。父親とされるのは、彼女が他の夫よりも長く、またもっとしばしば一緒にいたがる夫、彼女により性的満足感を与える夫だからです。兄弟全員が同時に集まる場合は、長男だけが妻と寝ることができません。子供たちは一番上の父親を「お父さん」と呼び、他はみんな「おじさん」と呼びます。より多くの夫を持つ女性は、好運で果報者だとみなされます。

このような慣習が存在するのは、兄弟全部が1人の女性と結婚すれば、富が兄弟間で分割されることがないからであると言われていました。

このような結婚制度があるために、結婚せず家族の重荷になっている女性が多くなります。昨今では、この慣習に反対する男性も出てきました。学校の教師をしているある男性は、兄の妻を自分の妻として扱うことを拒否して、現在家を出ています。

いろいろなNGOが、この社会制度を変えるために重要な役割を果たしています。私はこの計画に携わっていますが、資金と技術の面での制約に直面しています。現代社会から1000年遅れていると思われる社会のための特別なプログラムを計画することが今、本当に求められています。

ユニフェム北九州が発足

ユニフェム日本国内委員会北九州地域委員会「ユニフェム北九州」(会長：藤岡佐規子北九州市保育所連盟保母会会長)が発足し、7月9日、北九州国際会議場で設立総会が行われました。ユニフェム北九州は、日本では国際婦人年連絡会ユニフェム地域等委員会、横浜地域委員会に次いで3番目の地域委員会として設立されました。地域委員会は、国連婦人開発基金(United Nations Development Fund for Women: UNIFEM)に協力する日本国内委員会の実働機関として機能するものです。

国連婦人開発基金は、開発途上国の女性のためのプロジェクトを支援し、女性の自立や開発計画の政策決定過程への女性の参加を促進することを目的に、「国連婦人の十年基金」として1976年に設立されたもので、その後、1986年に「国連婦人開発基金(ユニフェム)」と名称を改め現在に至っています。

ユニフェムは、1978年から1991年の14年間に、アフリカ、アジア・太平洋地域、ラテンアメリカ、カリブ海地域、西アジア地域で750以上の作業チームに対して援助を行いました。このようなユニフェムの活動を支援するため、1992年11月にユニフェム日本国内委員会が誕生し、ユニフェム北九州の設立につながりました。今回303人が趣旨に賛同し、正会員として加入しました。

設立総会では、ユニフェム日本国内委員会会長の中村道子さんを招いて記念講演会が開かれ、参加者はユニフェムが果たしてきた役割や日本国内委員会のあり方、地域委員会の活動の重要性等についての説明に耳を傾けました。

地域委員会の事業として実施されるのは、

1. イベントやバザー等により開発途上国の女性の活動支援のための募金活動を行うこと
2. 開発途上国の女性たちとの相互理解を図り、具体的な協力・交流活動を通して女性の地位向上に役立てること
3. 開発途上国の女性の現状について講座・セミナー等を実施すること
4. ユニフェムの活動を広く市民に理解してもらうための広報活動を実施すること

などがあげられています。

今後、ユニフェム北九州は、会員数を増やしていくとともに、バザーによる募金活動など草の根的な活動を行いながら、国内委員会とも連携して開発途上国の女性の自立を支援していきます。



フォーラムの窓

社会開発の時代

ここ数年、世界会議が目白押しである。1990年の子供のための世界サミット、1992年の国連環境開発会議、1993年の世界人権会議、そして本年9月カイロで開かれた国連人口・開発会議、さらに、来年は、北京で世界女性会議も予定されている。実は国連設立50周年に当たる来年、もう一つ重要な国連による世界会議が予定されている。1995年9月にコペンハーゲンで開かれる社会開発に関する世界サミット(The World Summit for Social Development)、通称、社会開発サミットである。

このサミットは冷戦構造の崩壊後、前にもまして表面化してきた失業、貧困、犯罪、民族間抗争、市民戦争などの社会的、経済的危機に対処するため、世界の首脳が一堂に会して話し合おうというものである。この間の一連の世界会議が開発と環境、人口など開発を柱に掲げながら、開発の方向についてのまとまった議論が十分ではなかったことから、これまでの世界会議を統合する意味もある。また、現在進行中の第4次国連開発の十年において、目指すべき開発の方向を示すことになる。

現在はまだ準備が進行中であり、最終像は明かではないが、この会議について興味を引く点がいくつかある。まず、世界の現状については、これまでにない物質的進歩にもかかわらず、その成果の分配は平等ではなく、国や個人間の貧富の格差は拡大したとの認識を示していることである。その原因の一つとして「無謀な(reckless) 経済開発」を上げ、経済開発の限界を認めている。

次に、開発を明確に人間の発展(evolution)の手段として定義していることである。たとえ、それが経済開発であろうと、また環境にやさしい持続的開発であろうと目的は人間の進歩にあるとしている。この人間中心主義こそが、今後の開発を社会開発と名付ける所以でもあろう。

第3に、社会サミットで取り組むべき課題として上げられているいくつかの柱の中に、社会的統合(social integration)という聞き慣れない言葉がある。現在の世界が直面している危機を、社会のモラルの低下と人びとの間の連帯の弱体化に求め、文化や価値観の多様性を認めながら人びとの連帯を構築する道を模索しようとしている。貧困や失業といったこれまで伝統的に開発の分野で取り上げてきた社会問題に加えて、この社会的統合という、人びとの集団的意思を重視しているところに、これまでの開発の取り組みの限界を越えようとの意欲を見ることが出来る。

以上の経済開発中心主義の限界、人間の進歩のための開発、そして連帯の必要性は、実はこれまで「開発と女性」が主張してきたところである。このように、女性の視点から見た開発の定義が開発の再定義の主流になるのはうれしいことである。しかしながら、行動計画草案においては、女性は相変わらず課題や対象としては描かれていても、行動を実施する主体としては現れてこない。新しい開発の定義を実践するために、性別の視点から発言・実践しなければならないことはまだまだ多い。この点において日本がよい実践例を示し、世界の社会開発に貢献するようになりたいものである。そのとっかかりとして、日本の政府開発援助政策の方向を経済開発中心主義から社会開発・人間開発中心へと方向転換するように、もっと日本の女性が発言することはどうだろうか。

(財)アジア女性交流・研究フォーラム
主任研究員 織田由紀子

INFORMATION

●第5回アジア女性会議—北九州

- と き：1994年11月18日(金)～20日(日)
- ところ：北九州国際会議場（北九州市小倉北区浅野3-9-30）
- テーマ：女性と家族
—家族の民主化とより豊かな男女の共生関係を求めて—

今年の「アジア女性会議—北九州」は、国際家族年にちなんで、「女性と家族」をメインテーマに開催します。

社会の構造的な変化や価値観の多様化に伴い、家族のあり方が世界的に大きく変化しています。特に、東・東南アジア地域は欧米社会に比較して短期間に産業化が進められたため、社会・経済開発が家庭生活や女性の役割・地位に与えた影響は計り知れないものがあります。

そこで、この会議では、こうした家族の変化を踏まえ、家族の多様性を正しく認識するとともに、家族の民主化のための社会福祉のあり方や、女性問題と南北問題との関わりなどの議論を通じて、家族におけるより豊かな男女の共生関係の創造を目指します。多くの方がたの参加をお待ちしています。

参加申し込み・お問い合わせは、フォーラム（093）551-1220まで

◆プログラム

11月18日(金)

- 14:00～16:00 上野千鶴子講演会
- 17:30～21:15 アジアシネマ

11月19日(土)

- 10:00～12:00 自由研究発表会
- 14:00～17:30 国際シンポジウム
【パネリスト】
スリンダー・ジェットレー
(バナラス・ヒンドゥー大学教授・インド)
ダニエル・デッツナー
(ミネソタ大学準教授・アメリカ)
原ひろ子 (お茶の水女子大学教授)
福島瑞穂 (弁護士)
佐藤忠男 (映画評論家)
【コーディネーター】
ヤンソン柳沢由実子 (フリージャーナリスト)
- 13:00～18:00 アジアバザール
- 17:30～18:20 市民交流会

11月20日(日)

日米アジアワークショップ

- 〈総合テーマ〉アジアの家族にいま何が起きているか
—家族問題の解決と人権保障のためのネットワーク化に向けて—

第1セッション 9:30～12:00

テーマ：東アジアの少子化・高齢化をめぐる家族問題

第2セッション 13:00～15:00

テーマ：難民化する家族の生活問題と人権保障

第3セッション 15:15～17:00

テーマ：総括討論と行動ネットワーク宣言

●東アジア女性フォーラム in 北九州

来年北京で開催される第4回国連世界女性会議に向けて、世界中の女性たちが活動を始めています。

東アジア地域の女性の声をもっと北京会議に反映させようと昨年11月に結成された東アジア女性フォーラムでは、NGOの立場から提言を行うために、10月20日から、かながわ女性センターを本会場にして会議を行います。

北九州市では、本会議の出席者を招いて、次のとおり報告会を開催します。また、1985年のナイロビ世界女性会議の事務局長をつとめたレティシア・ラモス・シャハニフィリピン上院議員の講演も合わせて行います。

お問い合わせは、フォーラム（093）551-1220まで

- と き：1994年10月23日(日) 11:00～16:30
- ところ：国際村交流センター（北九州市八幡東区平野1-1-1）
- 参加費：1,000円（昼食代・資料代込）

編集後記

海外通信員セミナーが終わり、通信員たちは空港で見送る私たちに「See You Again」の言葉を残して帰りました。その決まり文句に終わりではなく、始まりのニュアンスがあるのだと気づきました。

それぞれ自国へと旅立った通信員の手には、私たちが渡したネットワークの回線がしっかり握られていました。 (〇)



財団法人 **アジア女性交流・研究フォーラム**

〒802 北九州市小倉北区浅野3丁目9-30 北九州国際会議場8F
PHONE(093)551-1220 FAX(093)551-7535